

理化学研究所

戦後日本の頭脳が集まった研究施設

・創設に尽力した渋沢栄一

理化学研究所は、渋沢栄一が創設委員長となり文京区本駒込に大正6年(1917)3月に誕生した施設です。渋沢栄一は、大正2年(1913)アメリカから帰国した高峰譲吉らが提唱した国民科学研究所の設立に賛同し財界から設立資金の寄付金を募り、政府からの援助を得るように働きかけるなど、創設に向けて資金集めに尽力しました。その後、理化学研究所は「理研ビタミン(ビタミンA)」「理研酒(合成清酒)」「アルマイト」などの発明・大ヒット商品を生み出し、その利益を研究資金に充てる理研コンツェルンを形成し、日本の科学技術研究を牽引する存在でした。

昭和21年(1946)、板橋区加賀に所在する陸軍板橋火薬製造所の跡地に、仁科芳雄(1890～1951)を主任研究員とする宇宙線研究室が入り、宇宙線観測や理論物理研究などの基礎研究が継続的に行われていました。また、昭和36年(1961)には、ノーベル物理学賞を受賞した湯川秀樹を主任研究員とする理論物理室が発足するなど、わが国における物理学研究の中心地である理化学研究所板橋分所として約70年活用されていました。

現在、理化学研究所の板橋分所の流れを汲み、板橋区舟渡に所在する理化学研究所板橋分室では、板橋区と共同研究契約を締結し、理化学研究所の新技术(シーズ)と区内関連企業のニーズを基に、新製品や新技术の開発と実用化をめざし、共同研究や技術支援を通じて、区内企業の新産業育成を図っています。また、見学可能機関として、広く見学希望者の受け入れを行っています。

・「陸軍板橋火薬製造所跡」とは

板橋火薬製造所は、明治9年(1876)、現在の板橋区加賀地域に所在した加賀藩下屋敷の跡地に設置された官営工場です。明治政府が初めて設置した近代的な火薬製造所および研究施設であり、昭和20年(1945)まで国内有数の火薬工場および火薬研究所として稼働していました。第二次世界大戦終了後、火薬製造所はその役割を終え、その跡地には、戦災で影響を受けた様々な企業や学校、研究所などが入居することになり、現在の史跡指定地にあたる地区(加賀一丁目7および8番)に理化学研究所板橋分所などが入りました。

・国指定史跡に指定された「陸軍板橋火薬製造所跡」

板橋区は、明治初年からの火薬製造所の歴史を、「工都」板橋における工業のさきがけとして位置付けるとともに、その遺構や建造物を近代化遺産・産業遺産として評価しています。また、製造所内に置かれていた火薬研究所による最先端の研究が、戦後日本の科学技術の発展に大きな貢献を果たしたことも重要な点です。

こうした近代における火薬製造所と研究所の歴史的価値が認められた結果、平成29年(2017)10月、加賀一丁目7および8番の地域とそこに残された火薬製造所の遺構や建造物を含め、国の史跡に指定されました。今後この地域を整備し、歴史・文化・産業を体感し、多様な人々が憩い、語らう史跡公園として公開していく予定です。



旧理化学研究所板橋分所跡・物理試験室



旧理化学研究所板橋分所、旧野口研究所、加賀公園一帯/平成28年10月撮影



旧野口研究所に現存する板橋火薬製造所時代の燃焼実験室・弾道管・試験室